

国立会中の会 50周年記念誌

私とくにたち 会報連載全5回中 第4回 2026年10月発行

(記念誌は今号が第4回となります。全5回の予定ですので本号含めて残り2回会報に挟み込まれます。)

私が見てきた国立の変遷

(中1丁目 市川 美智)

青梅線沿線から来た田舎の嫁は国立はもっと田舎だと思った

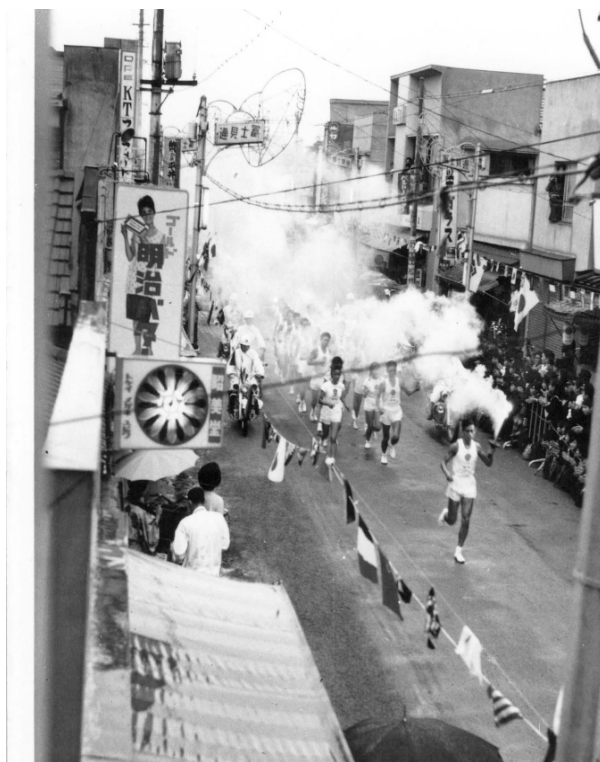
昭和35年(1960年)、この町に嫁ぎました。まだ国立町でした。老舗の市川注文洋服店はモダンな造りの建物で、富士見通りの現在の場所に位置し、一番街商店会に属しています。市川の父が昭和6年ころに創業しましたが、当時は人通りもまばらで、お客様は一橋大学の先生と工事関係の人だったと聞いています。

私が驚いたのは、水道が完備されていないので井戸水をくみ上げていたことでした。

富士見通りは殆どが砂利道で歩道はなく、歩きにくいと思っていました。この事実を示す写真が、昭和39年(1964年)10月9日、東京オリンピックの開幕前日、市川洋服店の2階の窓から身を乗り出して撮った2枚の写真です。沿道に詰めかけた人々は傘をさしていましたが、聖火ランナーが走る



聖火ランナーを先導するパトカーと白パイ



富士見通りを走る聖火ランナー

時には傘を畳んで見物しています。富士見通りに万国旗、各商店には日の丸の旗がみえ、市民が共に祝おうとする様子がみえます。

華やかなときを除けば、私は毎日洋服作りの仕事に追われ、家の外のお付き合いがない毎日でした。しかし、夫が国立高校の野球部の指導に出かけ商店会の会合に出られないので、義父に私が会に出るようにと言われ、商店会の役員を引き受けるうちに世間が広くなりました。

昭和40年(1965年)富士見台第一、第二、第三団地が建ち、数千人の人々が入居することになり、大学通りが谷保駅北口まで1本の道路で結ばれ、昭和41年には国立町は国立市になりました。

平成になり、義父が他界、夫と洋服店を続けてきましたが、既制服の時代になり、洋服を仕立てる仕事は減りました。国立学園生徒の制服を作っていたのは幸いでした。私と職人の高齢化がすすみ、針を通す作業が困難になり、平成24年(2012年)4月、最後の制服を納めて閉店としました。

私たち夫婦にとっての人生最大のできごと

昭和55年(1980年)、夫が野球部監督となって11年目、国立高校は西東京代表として甲子園出場を果たしました。神宮球場に行ければと国立市民がザルを回して寄付を募ってくれていましたが、驚く事態になり、試合前日大学通りに50台以上のバスが集結、二手に分かれて京都・大阪など



市川洋服店前で対箕島高校戦をTV観戦

中央で旗を振っているのは50周年記念誌第1回寄稿佐藤収一さんのお父様(株式会社サトウの創業者)

隣で応援しているのはくにたちサイクル先代社長の田中さん

の観光をして甲子園に午後3時に到着。対戦相手は前年優勝校の箕島高校。市川監督は、「髪の毛は無理に丸刈りにしないでよい」と言っていたのに全員が自主的に丸刈りにし、3年生のみ受験が近いので少し髪の毛を残していたといいます。

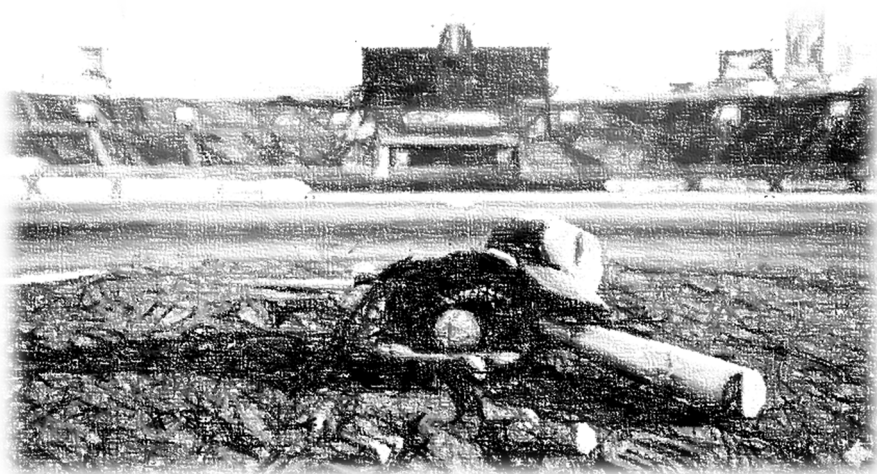
山口瞳氏は国立高校と市川野球を愛し、ずっと応援をしてくれました。忘れられない写真は、市川洋服店の前に椅子を持ち出し、臨時の応援団がテレビを見ながら声援を送ってくれている1枚です。中一番街商店会のみなさまや国立市の多くの方々が国立高校野球部に惜しみのない声援を送ってくださったことに、私たちは大きな感謝の念を抱いています。



夫が亡くなった後は、元甲子園組有志、61年卒有志が新年会に呼んでくれ、『息子』たちと楽しい時を過ごしています。厳しい指導の一方で優しいところもあったようです。

思えば、商店会の役員に夫の代わりに出て、会の皆さまと活動をしていく中で内気だった私が随分おしゃべりになりました。「国立会中の会」の会員として楽しい行事に参加させて頂きながらいつの間にか会長になり6年間務めさせていただきました。ありがとうございました。

国立高校が史上初甲子園出場を果たした時の新聞各紙 左・上・裏面



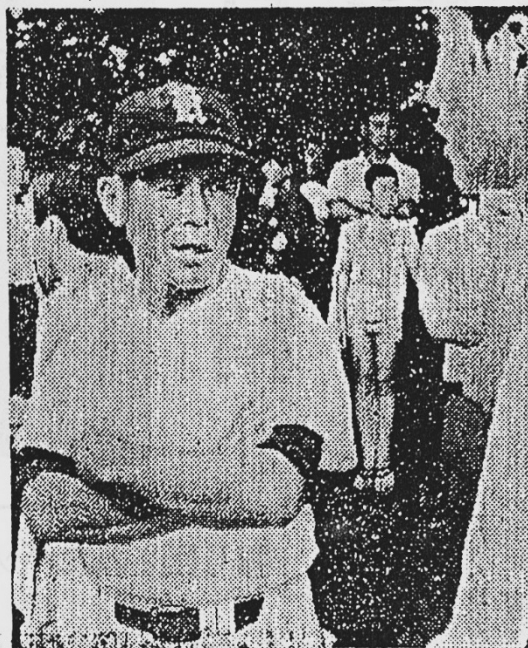
③

それでも、市川さんを監督に
つなぎとめているのは「期待感
のある姿しみがあからだ」と
いう。市川さんの理想は「礼儀

ではないですか」「甲子園出場を決めた都立國高ナインの戦力を市川忠房監督(注)はこう分析する。「だが、選手たちの冷静さと、チームの和は群を抜いている」と付け加えた。

それが、十年後の今日まで続いている。ほとんど毎日、午後三時過ぎから約二時間半、市川市川さんもぶん圓氣の良さには太鼓判を押す。また、自分たちが考へながら練習しているのも

和のある野球、説く
洋服店のご主人



選手に体調を聞く市川監督

人の従業員に任せ、自分は夜針を運ぶ。しかし、注文を受けるのは一切市川さんの仕事になっているため「私が練習に出ている間に訪ねてくれた初めてのお客さんを失うこともあるんです」と、市川さんは苦笑する。

このチームの特徴だろう。「押しつけられてやるよりも、自発的にやった方がいいし、またその方が選手たちの身にもつくと思うので……」。市川さんの言葉通り、グラウンドでの選手たちは、自分たちから進んで練習

この「考える野球」は、西東京大会で本領を発揮した。ナイフの持ち合わせをいかに冷静さとチームの中に根づいた和、それには「考える野球」が甲子園へのキップに結びついた。

山田監督は、甲子園行きが決まっても忙しかったが、その合間に縫って本業の洋服の仕立て

に取り組んでいる。四目に甲子
酉入りするため、三日までに結
期の決まったものの股取りをつ
けておかねばならないためだ。
「私がいなくて注文がとれな
い間は、寸法直しでもやって
もらおうと思っています」――
市川監督は、いつの間にか洋服
店の主人に戻っていた。

監
督

市川監督取材記事

国立の思い出

(中3丁目 佐藤 房江)

私が国立に移居したのは、昭和40年の終わりごろかと思います。まだ国立市にならず国立町でしたが、会話などではよく谷保村と言われていました。この地に落ち着いたのには、父が教員であったことが大きく関わっています。

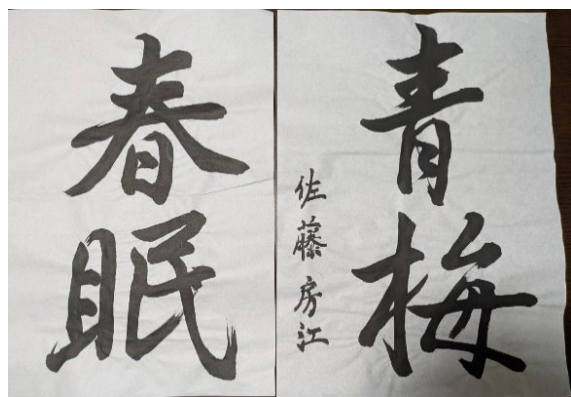
私の父は教育者として生涯を子どもたちのために捧げたと思います。大東亜戦争により軍人として北京に赴き、軍部で教育者として勤めました。終戦後引揚者として家族と共に故郷伊豆に帰りましたが、教え子の助言に従い、奥多摩の藤原小学校第二分校に勤め、土地の子どもたちのために尽力しました。

東京都の教員という条件で土地の分譲があり、只今の中3丁目、中浄水場の前の土地に安住の地を定めました。学校の仕事が終わると、父は自宅で書の教室を開いていました。父の亡きあとは私が書道教室を引き継いで、通ってくる子供たちのための指導に励みました。この一区画の住民は全て教員でした。特にご近所の綿田さん、坂上さんたちと親しくお付き合いをさせていただきました。住み始めてから少したって国立市と呼ばれるようになりました。学園都市で、静かな場所で、大学通りが堂々としておりましたが他の道路は石ころだらけで、一面くわ畑が広がっていました。春風が吹きますと砂埃がひどく、市内は砂ぼこりが舞い、家の中まで入ってきて大変でした。

バスは立川行きと国分寺行きとがりましたが、市内は歩くしかありませんでした。国立駅近くは店がありましたから、歩いて買い物に行ったものです。

朝起きて戸を開けると、富士山が美しく見えた事を清々しく思い出します。徐々に家々が建って、富士見台団地、郵便局、NHK学園、桜通りが出来上がり、国立高校、桐朋学園も賑やかになり、清々しい都市となりました。我が家の庭も「赤いバラ」「すずらん」の花が今も咲いております。

これからも国立市が美しい都市、学園都市として進歩できますよう願っております。私は只今98才となりました。若い人たちに負けないように日々努めてゆきたいと思っております。



私は国立で生まれ育ち、子どもを育て、長い年月をこの街で過ごしてきました。振り返ると、国立はいつの時代も緑が多く、穏やかな時間が流れる、本当に住みやすい街でした。

子どもの頃、祖母や近所の大人から聞いた話では、国立は堤康次郎氏の会社である箱根土地によって別荘地として開発され、中地区は300坪単位で分譲され、その後、東地区、西地区へと街が広がっていったそうです。大学通りは、堤氏が軽井沢の別荘へ向かう際の小型飛行機の滑走路として造られたという話も伝え聞きました。

明治33年生まれ祖母たちは、新しく中地区へ移り住んだ人たちが大学通りに桜を植えたと話していました。その桜も今では立派な大木となり、長い年月の積み重ねを感じさせます。

戦後には、立川基地のアメリカ兵相手の飲食店などが国立にもできそうになったことがあったそうです。しかし、地域の婦人たちが立ち上がり、文教地区としての環境を守るために活動し、国立駅周

辺にそうした店が増えないような仕組みづくりが進められたと聞いています。先人たちの努力のおかげで、今の安全で落ち着いた街並みがあるのだと思います。

「国立」という地名は、国分寺と立川の間にあることから名付けられたとも聞いて育ちました。

我が家の北側には、池田勇人の関連者のお宅と聞いているテニスコートのある別荘がありました。コートを造るために少し土地が足りず、我が家の土地の一部を



祖父の胸像を挟んで4世代の家族写真

譲ったそうです。白いウェアに身を包んだ人たちが優雅にテニスを楽しむ姿は、子どもの頃の印象深い思い出です。

紀ノ国屋が国立にできたのは昭和45年頃だったと記憶しています。ちょうど私たち夫婦が新しい生活を始めた頃でもあり、特別な思い出があります。その後 JR に引き継がれましたが、今でも国立を象徴する風景の一つだと思っています。

当時の一橋大学は学生も今ほど多くなく、街全体が静かでゆったりとしていました。子どもたちが小さい頃には近くに大きな公園が少なかったため、一橋大学のキャンパスが遊び場でした。兼松講堂の周りでグリコや鬼ごっこ、かくれんぼをして、一日中夢中で遊んでいました。

子どもたちが通った第八小学校は開校間もない小さな学校でしたが、とても家庭的な雰囲気がありました。障がいのある子も同じ教室で学び、運動会のかけっこでは、みんなで自然に伴走する姿

が見られました。その光景は今でも心に残っています。

当時は塾へ通う子どもはほとんどおらず、夕方まで野球や外遊びをしていました。4時頃になると、一人だけ塾へ向かう友達が少し寂しそうに帰っていく姿を覚えています。

保護者会でも勉強の成績より、子どもたちの生活や友達との関わり、楽しかった出来事などが話題の中心でした。我が家の近く、中地域には子ども会があり、

ハイキングやキャンプにもよく出かけました。また、中学年になると7、8人で家庭塾をつくり、一週間ごとに各家庭を回って勉強したり遊んだりしました。お泊まり会や夜の学校でのお化け大会などもあり、親も子も一緒になって楽しんだものです。あの頃に育まれた地域のつながりは、子どもたちにとってもかけがえのない思い出になっているようです。

今では子どもたちも家庭を持ち、その子どもたちも成長しました。時代は大きく変わりましたが、国立には今も変わらず、緑豊かな大学通りと文教地区としての落ち着いた雰囲気があります。

先人たちが守り育ててきたこの街の景観や理念を、私たちも大切に受け継ぎ、次の世代へつないでいきたいと思います。それが、この街で暮らしてきた者の願いです。

「この街で暮らせたことに感謝しながら、これからも国立の魅力を大切に見守っていききたいと思います。」



家庭塾で「さくらマラソン」に出場した時

国立に住んで～1999年12月7日～

(中1丁目 樋口 秀雄)

注釈：樋口秀雄さんがご生前につづられた文章をご家族様から国立会中の会にお寄せいただきました。

私が国立に移り住んだのは昭和21年でした。駅前のロータリには鶴のケージがあり、今の多摩信の処には土地会社の建物がありました。

雨が降ると大学通りには河の様に水が溜まり、大きな蛙が泳いでいるのを見かけました。家もまばらで高い建物もなく自然が至る所にありました。空気は澄み、満天の星空が眺められ、国立駅と一橋大学のほゞ中程にある私の住まいには、駅員がメガホンで「クニタチ、クニタチ」と呼ぶ声が聞こえてきました。勿論大学の鐘の音も聞こえ、時計がなくても大体の時間がわかりました。

今の市庁舎の附近には農家の人達が集めた肥料だめがあり、駅付近に住んでいるサラリーマンと農家の人、それに学生が程よく住み合って学園都市が形づくられ、本郷、早稲田に続いて、昭和

27年だと思いますが国立も制定間もない「文教地区」に指定され、国立に住む事を誇りに思ったものでした。

その後結婚し子供が生まれ、家を建てましたが、家庭から出るゴミは狭い庭でしたが計画的に庭に順番に穴を掘って埋め、風呂は五右衛門風呂を谷保生まれの職人さんに造っていただきました。未だに健在です。

此の間40年余りになりますか、一度も薪を買った事がなく、庭の木の枝から落葉、古紙まですべて焚き、知り合いの人や大工さんから届けていただいた古材を焚いて老妻と共に元気でありたいと話合っていました。共に加齢が進み、2000年を期してとりこわし、省エネ住宅を建てようと考えようになりました。50年近く次々と穴を掘って埋めた生ゴミと風呂から出た木灰が程よく混ぜ合った庭の土は見事な土となり、毎年トマト、インゲン、ホーレンソー、菜葉が無農薬野菜として育ち、老夫妻の食事の中心となっています。子供のために造った小さな池には毎年蛙が集まり、オタマジャクシが育ち、秋虫や蛙それに金蛇(カナヘビ)まで未だに健在です。

最近、国立にもマンション建築が盛んになり、自動車が増え、満天の星空を知らない孫が育ち、空気も汚れてきました。五右衛門風呂から出る煙も近所に気兼ねせねばならなくなりました。結婚以来守り通した、生ゴミと燃えるゴミを出さないという吾が家の方針にピリオドを打つ時が近づきました。そのあとのゴミ処理について一家で話し合いたいと老妻と考えています。

五右衛門風呂が現役を引退する時に“五右衛門風呂よさようなら”という一文を書こうかと妻が時々口にしています。

時は21世紀となりますが、何とかして住みよい町、そして公害の少ないゴミ減量とリサイクルの進んだ、世間に誇れる国立を21世紀に残したいと考えています。

都市計画も環境もそして生態系も一度失敗すると絶対元に戻せないと言っても過言ではありません。

あとがき（私の夢）

新聞やテレビで見た事を夢の一つとしてまとめました。生ゴミ発電をして出た土は農家の人が肥料として使って農産物を育て、そして市民がわけていただいて食べるという夢が実現したらいいなと考えています。

もう一つは私は国立に住み、ある大学の工学部に通学し約45年間主として自動車用ディーゼルエンジン開発、そしてそのあと学生の教育をして参りました。CO₂を減らそうとするとNO_xが増すというジレンマがありました。たまたま12月6日のNewsでも低燃費の車は逆に窒素化合物がふえる、そのため税金を安くしたり高くしたりする事をのばそうということが放映されました。私のジレンマとまさに一致しています。自動車用エンジンを増やし公害を起こした罪滅ぼしを胸に余生を送りたいと思います。

